# 独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

## おばあちゃんとの旅

香川県　高松市立国分寺中学校　三年　山下　花音

「あんた、水使いすぎやで。」

私のおばあちゃんの口癖である。正直、おばあちゃんの気持ちが最初は理解できなかった。今では、蛇口をひねったら、いつでも水道から水はでてくるし、使いすぎても世界中から水がなくなるなんてありえない。時代遅れの口癖であると思い、いつも聞き流していた。しかし、おばあちゃんと行ったため池と香川用水記念公園、おばあちゃんの農業の手伝いという経験が私の水に対するイメージを大きく変えた。

瀬戸内海型気候に属する私たちの地元である香川県は、非常に温暖でかつ乾燥した気候を持つことで有名だ。年間降水量も、千百五十ミリと、他県と比較しても非常に少ないという特徴がある。私たち讃岐県民が「うどん県」と誇りをもつ、うどんに使われる小麦もこのような気候だからこそ育てることが可能である。しかし、私は、この気候がどれほど多くの人の暮らしを困らせ、過去の人々がそのことに立ち向かって今の私たちの快適な暮らしにつながっているのかを全く知らなかった。私は、おばあちゃんに連れられて、ため池と香川用水記念公園に行き、香川県の水の歴史について学ぶことになった。香川県は昔、「旱天五日に及べば水湿の潤いなく霖雨二日に及べば洪水の恐れあり」と言われるほど、飢餓者が続出するほど雨が降らない時期が長期間続いたり、時には、大雨による鉄砲水や暴風で民家や農作物等に深刻な影響を与えたりするなど、人々を悩ましていた。それに立ち向かったのが西嶋八兵衛をはじめとする先人たちなのである。彼らは、数年で九十余のため池を築造したり、東西に流れる香東川とよばれる川を一本化したりして問題解決を図ったのである。また、その何十年後かに、ため池に加えてより十分な用水の確保を行うため、香川用水が建設されることになった。香川用水とは、高知県の早明浦ダムを水源に、徳島県の池田ダムを経て、香川県に水が供給されている多目的水路である。このように、今私たちが当たり前のように水を使っていることは、当たり前の自然の成り行きではなく、多くの人々の苦労や努力、他県との協力があるからこそだと気づかされた瞬間であった。おばあちゃんは、そのことを私に伝えたかったのだと思う。

私のおばあちゃんは、農家であり毎年多くの農作物を育てている。この夏私は、農家を少し手伝った。すると想像以上に大変であった。朝と夜に満遍なく水をかけなくてはならない。気温が三十度を超えても台風が接近していて風が強くなっていても、水をかけたり、手入れをしたりしなければならない。おばあちゃんに圧倒されるばかりだった。おばあちゃんの家で食べた、ミニトマトや茄子、キュウリのサラダは、水分を多く含んでいて、とてもおいしかった。おばあちゃんは、「今は昔よりもほんまに楽になったわ。」と言っていた。昔は、水を井戸からくむ作業から始めないといけないため、今よりももっと労力をかけなければならなかったそうだ。おばあちゃんとの旅によって、私は水を使うことの大切さや、先人たちの努力に感謝しなければならないことを肌で感じることができた。お盆になって、はとこがおばあちゃんの家に遊びに来て、水鉄砲で遊ぶため、水を大量に使っていた。

「あんた、水使いすぎやで。」

おばあちゃんの言葉がいつもより新鮮に聞こえた。